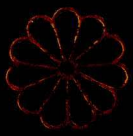

きものの随筆

森田たま 著

講談社版

検印
廃止

ぎゐん随筆

著者　森田たま

昭和三十九年一月二十日　発行

発行者　東京都文京区音羽町三ノ十九　野間省一

印刷所　東京都板橋区志村町一ノ一　東洋印刷株式会社

製本所　東京都文京区春日町三ノ四　横田製本株式会社

発行所　東京都文京区音羽町三ノ十九　講談社

電話東京(942)一一一一番(大代表)　振替東京三九三〇

定価　三百八十円

乱丁・落丁本は本社またはお買求めの書店にてお取替へいたします。

© Tama Morita 1964

目

次

私は天使ではない……一一
青葉の雨……一四
選挙の着物……一八
自分を信じる……二二
ある手紙……二〇
自分の鉱脈……二五
貴重な友……二八
第一日の失敗……四一
紅いじゆうたん……四四

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo

日曜のない国会……五〇
国会一年生の記……五三
浜松行……六〇
制服の処女……六三
悪夢の四十八時間……六七
ダムと紅葉……七二
もめん随筆まで……七六
「残月」など……八一
一冊の本……八四

大徳寺……八八
がらくた蒐集……九一
硝子の中の女……九三
花の唇……九七
思ひ出のあの歌この歌……一〇一
空への夢……一〇五
男のきもの……一〇八
もめんの魅力……一一三
日本のきもの……一一七

素のままの味……一二四
こぞの雪いまいづこ……一二七
雪……一三〇
多忙の弁……一三三
初釜……一三五
黒猫……一四一
雛……一四三
白酒……一四五
山水の味……一四九

わたしの母校……一五七
アパート……一六〇
文士……一六三
椿……一六八
あぢさゐ……一七二
花と飲みもの……一七六
私のふるさと……一八〇
いまは蕾……一八五
応援づかれ……一九二

病床記……一九七
退院はしたけれど……二〇三
蟬しぐれ……二〇六
軽井沢の夏……二〇九
春待つこころ……二一六
日本の女……二一九
ラヂオドラマ・花も雪も……二二三

著者　自装

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo

ぎゐん隨筆

私は天使ではない

人間長生きをするといろいろな目に出会ふものである。今度私が参議院議員に立候補の決心をしたについては、自分は自分なりの考へを持つてゐるのだけれど、まはりの人は驚いたり、あきれたりしたらしい。賛成の人もあれば、絶対反対とひきとめて下すつた方もある。絶対反対の方方はまづ第一に私の名前に傷のつくことをおそれるといふのであつた。

私の名前、……それは何だらうと考へた。二十数年こつこつと、いはゆる随筆と呼ばれるものを書いてきた、この森田たまといふ名前は、真綿にくるんで床の間に据ゑておかねばならないほど大切なものであらうか。清純なあなたを政界の泥沼に染ませたくないと云つた人もある。政界とはそれほど下劣なところなのか。それなれば一そう自分の眼で見究めてみたい。私は天使ではないから、清純といふ言葉はあてはまらない。

賛成して下すつた中の一人、吉川英治さんはおもしろいねと云はれた。おたまさんの性格の中

には天衣無縫といつたところがあるから、きつと何かやるだらうねと期待をかけて下すつた。天衣無縫、つまり生まれつ放しの人間といふことですかと私も笑ひ出してしまつたが、むかし自分が筆をとりはじめたころ、いち早く眼をつけて取りあげて下すつた戸川秋骨先生は、アンファンテリブルの魅力を持つてゐるとほめて下すつた。

自分ではどこがアンファンテリブルなのかよくわからなかつたが、子供の時からよくまはりの人をおどろかせるくせがあつた。本人のあたまの中には、正しいと思ふ理由があつて行動したことを、まはりの人はおどろくのである。気がしれないと云はれ、非常識だと云はれた。どこか世間の歯車からは、はづれてゐるところがあるのかもしれない。

終戦直後、衆議院に出ないかと人から誘はれたことがあつた。一考の余地もなく、直ちにことわつた。私は筆を持つてゐます。いひたいことがあれば自分で書きます。何もわざわざ人中へ出て、口でしやべり散らすことはないでせう。

何といふ思ひあがつた言ひ草であつたかと、かへりみて頬があからむ。当時の私は明治時代の、与謝野晶子女史が政治家を、俗悪きはまりなきものと軽蔑された考へ方を、そつくりそのまま受けついで、それがどう俗悪なのか、じつくりと思ひめぐらしてみたこともなく、子供のやうに単純に毛ぎらひしてゐたのであつた。

戦後の十六年の歳月が、すこしづつ私を教育してくれた。

口でしやべることと、筆で書くことと、そのあひだにどんな大きな開きがあるといふのだらうか。書くことは高尚で、しやべることは低俗だとは、だれがつけたきまりであらう。政治家は汚職のかたまりのやうにいはれてゐるが、全部が全部さうであつたら、国といふものが成りたつてゆくはずがないではないか。

あんたのしてることはまるでお姫さまみたいですよ、そんな風ぢや選挙なんてできつこないわよと、つい最近も女流議員のある人からどやされた。私の政治といふものに対する考へもまた、お姫さまの考へかたであるかもしれない。だがしかし、それでもよいではないかと私は思ふのである。いづれの世界をながめても、善と悪とがなひまじつて成立してゐない社会はない。政治の世界に一分の望みをおくことも、おかないよりはましではなからうか。

ふしぎなことに、立候補を決定したとたん、去年の夏から書きなやんでゐた小説の構想が、すらすらと浮かんできた。人間の頭脳は一角に刺激を受けると、他の細胞まで活発に動き出すといふことがあるのだらうか。はじめての経験である。

青葉の雨

参議院の選挙に立候補などしたものだから、会ふほどの人にさぞ大へんでせうねとねぎらはれる。なるほど大へんは大へんだけれど、しかしまた一方に、思ひがけない選挙の余得といふやうなものもあつて、なかなかにたのしい。

たとへば、行つたこともない遠い山間の町へ行つて、その町のボスと呼ばれる女傑に会つたり、(何と日本といふ国は、町々、村々に、すぐれた婦人が多いことだらう)それから また、土地土地の郷土料理を味はふ機会に恵まれたり、美しい風景を見たり、ふつうにはぽつりぽつり、何年かかるところを、わづか二ケ月のあひだに、あれもこれも同時に経験することになつて、実にありがたいといふ気がしてゐる。このあひだもふるい愛読者の方から、「もめん随筆」の中の故郷をさがすといふ小文に書かれてある秋田弁が、いまだになつかしく思ひ出されるといふお手紙を頂いたが、その山間の僻村にも五十年ぶりで訪れて、昔ながらの草木を見ることができ

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongboo